

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第53集

万吉西浦遺跡Ⅲ

2025

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第53集

ま げ ち に し う ら
万吉西浦遺跡Ⅲ

2 0 2 5

埼玉県熊谷市教育委員会

序

私たちの郷土熊谷は、丘陵、台地、沖積低地と、地形が変化に富んでおり、関東を代表する2大河川である利根川・荒川が市内を流れ、大河がもたらす肥沃な大地と豊かな自然が広がっております。このような自然環境のもと、市内には、先人たちによって多くの文化財が営々と引き継がれてきました。これらの文化財は、郷土の発展やその過程を物語る証であるとともに、私たち子孫の繁栄の指標ともなる、先人の貴重な足跡であります。私たちは、こうした文化遺産を継承し、次世代に伝え、さらに豊かな熊谷市形成の礎としていかなければならぬと考えております。

さて、市内には地下に埋蔵されている多くの遺跡が所在します。そして、これらの遺跡内では各種開発が行われ、遺跡を保護・保存できない場合が多数あります。その場合には、発掘調査という記録保存を行い、後世に伝えるべく方策を探っています。

本書は、令和6年度に実施された万吉西浦遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

本書が、埋蔵文化財保護、学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として、広く活用されることとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護に御理解、御協力を賜りました関係者の皆様には、厚くお礼申し上げます。

令和7年11月

熊谷市教育委員会
教育長 渋谷 昌美

例　　言

- 1 本書は、万吉西浦遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査及び整理・報告書作成に係わる費用は、宗教法人見性院に負担していただいた。
- 3 本調査は、墓地建設工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査であり、整理・報告書作成作業も含め、熊谷市教育委員会が実施した。
- 4 本事業の組織と経緯は、「発掘調査の概要」に記載のとおりである。
- 5 本遺跡の発掘調査期間は、令和6年5月16日から6月17日までであり、整理・報告書作成期間は、令和7年6月5日から11月28日までである。
- 6 発掘調査の担当及び本書の執筆・編集は、森田安彦が担当した。
- 7 発掘調査における写真撮影及び遺物の写真撮影は、森田が行った。
- 8 基準点測量は、株式会社東京航業研究所に委託して実施した。
- 9 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等から御教示、御協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

(敬称略)

宗教法人見性院 代表役員 橋本英樹・寺務 宮崎久夫、埼玉県教育局文化財・博物館課

凡 例

1 本文中、遺構の略記号は、次のとおりである。

SD……溝跡 SJ……屋外埋甕 SK……土壙 P……ピット

2 土層断面図及び平面図中の表記記号は、次のとおりである。

S……礫 P……土器

3 挿図中、断面図に添えてある数値は、標高を示している。

4 遺構挿図中、遺物に添えてある番号は、該当する遺構の遺物挿図中の遺物番号と一致する。

5 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のものは個別に示した。

土器……1/4 石器……1/2

6 遺物実測図の中で、中心線はすべて実線で示した。

7 写真図版の遺物縮尺は、すべて任意である。

目 次

| | | |
|--------------------|--------------|----|
| 序 | 2 調査の方法 | 6 |
| 例 言 | 3 基本土層 | 6 |
| 凡 例 | 4 検出された遺構と遺物 | 6 |
| 目 次 | III 遺構と遺物 | |
| | 1 土壌 | 8 |
| I 発掘調査の概要 | 2 屋外埋甕 | 10 |
| 1 調査に至る経過 | 3 掘立柱建物跡 | 12 |
| 2 発掘調査・整理報告作業の経過 | 4 ピット | 12 |
| 3 発掘調査、整理・報告書作成の組織 | 5 溝跡 | 13 |
| II 遺跡の概要 | 6 噴砂・噴礫 | 14 |
| 1 立地と環境 | IV まとめ | 15 |

挿 図 目 次

| | | | |
|----------------|---|--------------------|----|
| 第1図 遺跡の範囲と調査地点 | 2 | 第7図 第2号土壌・出土遺物 (1) | 9 |
| 第2図 埼玉県の地形図 | 4 | 第8図 第2号土壌・出土遺物 (2) | 10 |
| 第3図 周辺遺跡分布図 | 5 | 第9図 第1号屋外埋甕 | 11 |
| 第4図 基本土層 | 6 | 第10図 第1号掘立柱建物跡 | 12 |
| 第5図 調査区全体図 | 7 | 第11図 第5～9号ピット | 12 |
| 第6図 第1号土壌・出土遺物 | 8 | 第12図 第1号溝跡・噴砂跡 | 13 |

図 版 目 次

| | |
|---|---|
| 図版1 遺跡周辺の地形航空写真(平成21年撮影) 遺跡範囲航空写真 (平成21年撮影) | 第1号屋外埋甕 |
| 図版2 調査区遠景 (南から: 平成11年3月20日 撮影) 調査区近景 (南から: 令和6年6月13日 撮影) | 第1号屋外埋甕半裁 第1号埋甕調査状況 |
| 図版3 調査区垂直写真(令和6年6月13日撮影) 調査区東壁土層 (西から) | 図版4 第1号土壌 (北から) 第2号土壌調査状況 (北から) 第2号土壌遺物出土状況 第2号土壌遺物出土状況 第2号土壌完掘 (北から) |

| | |
|----------------------|---------------|
| 第1号掘立柱建物跡（ピット3） | 調査風景 |
| 第1号掘立柱建物跡（ピット1） | 図版7 第1号土壙出土遺物 |
| ピット6 | 第2号土壙出土遺物1 |
| 図版5 第1号溝跡遺物出土状況（南から） | 第2号土壙出土遺物2 |
| 第1号溝跡完掘（北から） | 第2号土壙出土遺物3 |
| 第1号溝跡調査状況 | 第2号土壙出土遺物4 |
| 第1号噴砂半裁（東から） | 第2号土壙出土遺物5 |
| 図版6 第2号噴礫確認状況（西から） | 第1号屋外埋甕 |
| 第3号噴礫確認状況（東から） | |

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

本遺跡は、これまで2回の発掘調査が行われている（第1図）。

第1次調査は、昭和54年2月1日～3月10日まで、ほ場整備に先立って実施したもので、縄文時代中期の屋外埋甕1、集石1、集石土壙2、ピット1、土壙2、古墳時代の住居跡2、近世の溝跡4、土壙1が調査された。第2次調査は、昭和55年2月12日～2月23日まで、堀の掘削工事に先立って実施したもので、平安時代の溝1、時期不明の礫群が調査されている（1980：熊谷市教育委員会）。

今回の第3次調査は、宗教法人見性院の墓地建設に伴い、埋蔵文化財の現状保存が困難と判断されたために実施したものである。

平成27年3月23日付で、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、宗教法人見性院より提出された。これを受け、熊谷市教育委員会は、届け出のあった熊谷市万吉798-1、800-2、805地内は、埋蔵文化財包蔵地（県遺跡No.59-066：万吉西浦遺跡）に該当することから、埋蔵文化財の詳細な状況を把握するため、平成27年4月24日試掘調査を実施した。この調査により、対象区の南東部で、現地表面下約32cmで縄文時代の遺構・遺物が確認された。墓地の掘削は、現地表面45～60cmであり、保護層を設けることができないことから、届出者と協議し、縄文時代の遺構・遺物が確認された箇所は開発から除外することで合意した。

その後、開発から除外していた、熊谷市万吉800-3、805-2について、墓地建設を行いたい旨の相談が再度事業者からあり、令和6年3月21日付で、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、当教育委員会は、発掘調査の措置が適当である旨の副申を付して、埼玉県教育委員会あてに進達した。その後、令和6年4月18日付で、熊谷市教育委員会教育長あてに埼玉県教育委員会教育長から周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等についての通知がなされ、発掘調査の指示がなされた。

発掘調査に先立ち、文化財保護法第99条の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を、令和6年4月23日付け熊教社埋第73号で提出し、熊谷市教育委員会が実施した。

1980年『昭和54年度 熊谷市埋蔵文化財調査報告 万吉西浦遺跡』熊谷市教育委員会

2 発掘調査・整理報告作業の経過

発掘調査は、令和6年5月16日から6月17日にかけて実施した。調査面積は約114m²である。

調査は、令和6年5月16日に重機による表土除去を行い、その後人力による遺構確認作業を行った。

検出された遺構は、縄文時代中期の屋外埋甕1、土壙2、時期不明の掘立柱建物跡1、時期不明溝跡1で、順次掘り下げを行った。

また、遺構の分布状況については、平面図を作成した。遺構の写真撮影については、遺構ごとに行い、6月14日にドローンによる調査区全景の写真撮影を行い、6月17日に重機による埋め戻しを行い、調査を終了した。

整理・報告書作成作業は、令和7年6月から令和7年12月にかけて実施した。

遺物の洗浄・注記、接合、復元作業を行い、実測作業を開始し、これと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付を行った。また、これらと並行して、原稿執筆を行い、最後に印刷業者の選定を行い、校正を経て本報告書を刊行した。



第1図 遺跡の範囲と調査地点

3 発掘調査、整理・報告書作成の組織

主 体 者 熊谷市教育委員会

教 育 長 野原 晃（令和6年度）、渋谷 昌美（令和7年度）

教 育 次 長 三友 孝二

社会教育課長 小澤 信行

社会教育課文化財保護・市史編さん担当副参事 吉野 健

社会教育課副課長兼文化財保護係長 松田 哲

主 査 小島 洋一（令和6年度）

主 査 茂木 留美

主 任 腰塚 博隆

主 任 森田 安彦

主 任 山川愛希子

主 事 山川 守男（令和6年度）、令和7年度嘱託職員

主 事 大野美知子（令和6年度）、令和7年度嘱託職員

主 事 小林 美咲（令和7年度）

嘱 託 職 員 磯崎 一

II 遺跡の概要

1 立地と環境

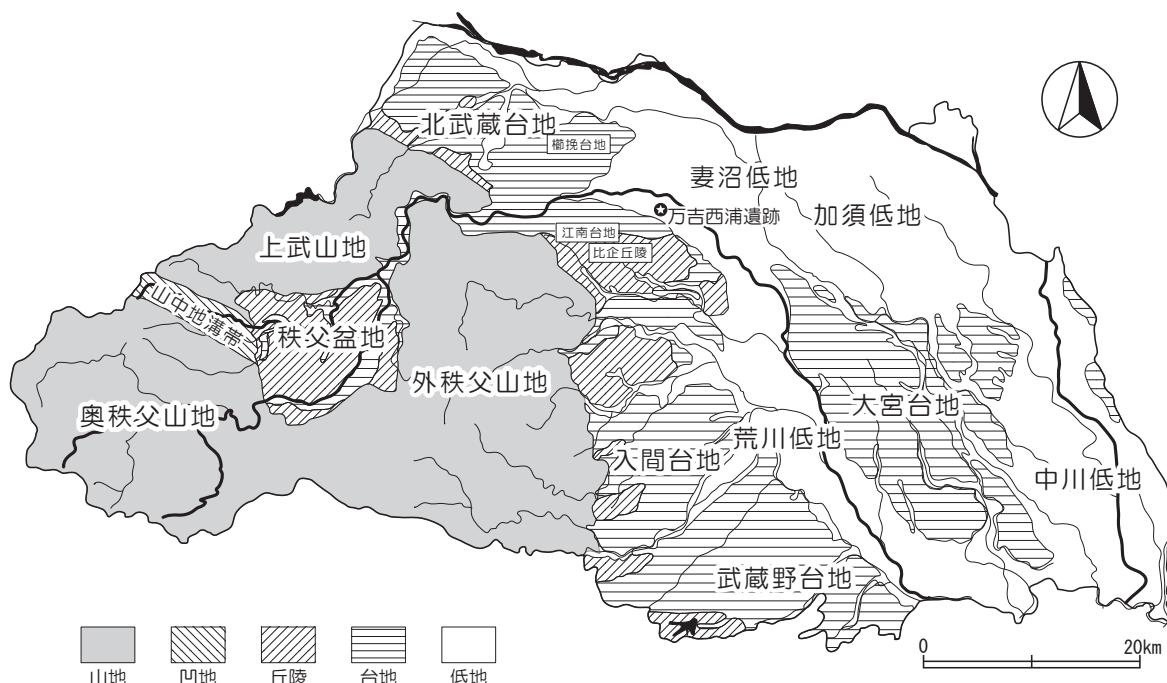
熊谷市は、北側の群馬県との境を利根川が、南側は江南地域及び大里地域との境を荒川が、それぞれ西から南東方向に流れており、関東地方の2大河川が最も近接する地域にある。地形的には、市の西側に櫛引台地、荒川を挟んで南側には江南台地・比企丘陵、北側及び東側には妻沼低地が広がっている（第2図）。

櫛引台地は、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称で、寄居町波久礼付近を扇頂として、東は熊谷市三ヶ尻付近まで延びており、標高は、約36～54mを測り、妻沼低地に向かって緩やかに傾斜している。荒川に面した櫛引台地東端には、独立丘陵である觀音山（標高81m：第3紀層の残丘）があり、台地からの比高差約25m、沖積地からの比高差約35mを測る。

櫛引台地の東側には、沖積世に荒川の乱流により新たに形成された新荒川扇状地が広がっている。新荒川扇状地は、熊谷市の南西に位置する深谷市菅沼付近を扇頂として、妻沼低地へと広がっており、自然堤防や微高地、後背湿地が発達している。

江南台地は、寄居町金尾付近より熊谷市箕輪に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な洪積台地である。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10~15m程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。

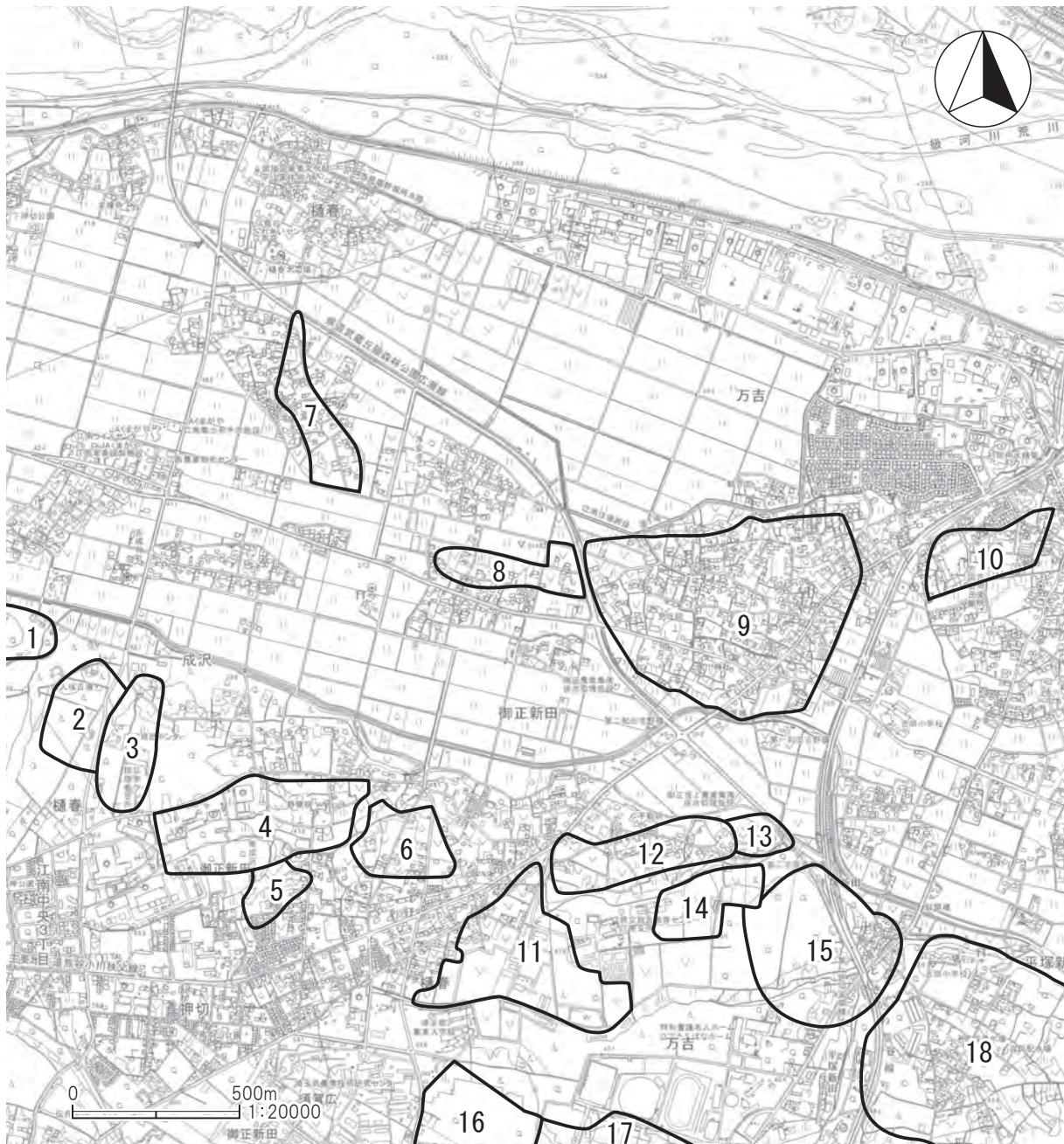
今回報告する万吉西浦遺跡は、現荒川流路から南約1kmの、新荒川扇状地に位置している。周辺の水田面との比高が数十cm高い微高地となっており、遺跡の南側には和田吉野川が東流している。



第2図 埼玉県の地形図

荒川右岸の同様の立地遺跡には、宮前遺跡（第3図7）、宿遺跡（第3図8）、村岡古墳群（第3図10）がある。本遺跡と連続する宿遺跡では、昭和57年（1982）に、道路改良に伴って発掘調査が行われており、室町時代～江戸時代にかけての集石土壙や火葬跡が12基検出され、板碑、銭貨、石臼、陶器等が出土している（1995：江南町）。

江南台地上の台地崖線部には、発掘調査の行われた遺跡として、上前原遺跡（第3図1）、万吉下原遺跡（第3図15）が位置する。



- 1. 上前原遺跡
- 2. 行人塚古墳
- 3. 代遺跡
- 4. 静簡院遺跡
- 5. 合羽山遺跡
- 6. 上原遺跡
- 7. 宮前遺跡
- 8. 宿遺跡
- 9. 万吉西浦遺跡
- 10. 村岡古墳群
- 11. 向原遺跡
- 12. 中原遺跡
- 13. 天神山遺跡
- 14. 松原遺跡
- 15. 万吉下原遺跡
- 16. 八軒遺跡
- 17. 鹿島遺跡
- 18. 瀬戸山古墳群

第3図 周辺遺跡分布図

上原遺跡は、7次に渡る調査が実施され、縄文時代中期～後期の住居跡7軒、集石土壙47基が検出されており、該期に営まれた大規模な集落跡である。また、7世紀中葉の古墳1基も調査されている。周溝外側で直径24.2mの円墳と推測されており、河原石積の胴張型石室が調査されている（1983・2006：江南町教育委員会、2019・2023：熊谷市教育委員会）。

万吉下原遺跡は、昭和48年（1973）に発掘調査が行われており、古墳時代の方形周溝墓3、円墳3が調査されている。第1号墳は、直径18mの円墳で、主体部は凝灰岩切石積の胴張型石室が確認されており、金銅製鉗具、金銅製耳環、金銅製責金具、鉄製鞘尻金具、刀子等が出土している（1991：埼玉県教育委員会）。

2 調査の方法

調査区は、標高32mのほぼ平坦地で、表土を重機で除去後、遺構の掘り下げを行った。遺構の測量は、世界測地系国家方眼座標（国土標準平面直角座標第IX系）による基準点測量を委託して行い、調査区全体を網羅できるように、1辺5mのグリッドを設定して行った。実測作業にあたっては、交点を基準に水糸で1m間隔のメッシュを張り、簡易遣り方による測量を行った。

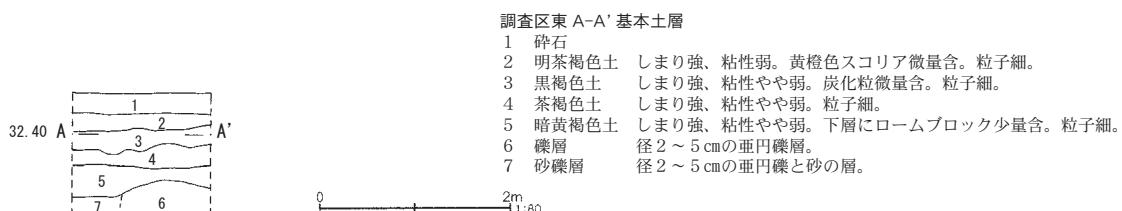
3 基本土層

調査区東壁で基本土層を実測した（第4図）。7層に分層され、第2～3層が近世～平安時代、第4層が縄文時代、第5層がロームの再堆積土で、その下層には、第6・7層の礫層または砂礫層となる。部分的には砂礫層の上部に砂層が存在する。

4 検出された遺構と遺物

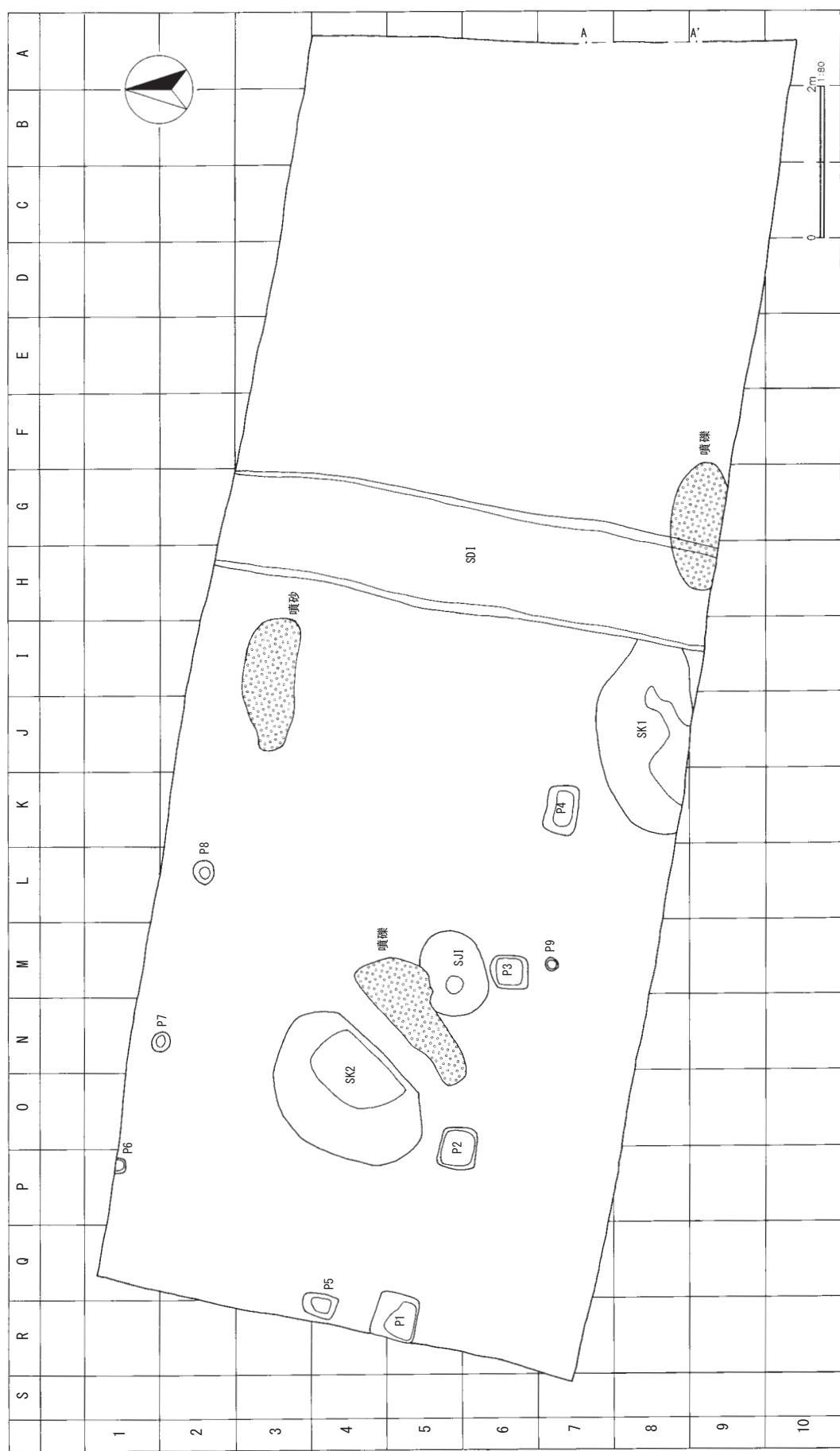
本調査地点では、縄文時代中期の屋外埋甕1基、土壙2基、時期不明の掘立柱建物跡1、溝1が検出された（第5図）。

このほか、時期不明の地震の液状化による墳砂・墳礫が4箇所で確認されている。遺物は、縄文土器・石器が出土し、その出土量は、コンテナ（大きさ：縦34cm×横54cm×深15cm）にして3箱であった。



第4図 基本土層

第5図 調査区全体図



III 遺構と遺物

1 土壙

第1号土壙 (第6図・図版4・7)

位 置 I・J・K—8グリットに位置する。南側1/3が調査区外にかかり未調査となっている。東端を第1号溝跡によって切られている。

遺 構 長軸(2.6)m、短軸(1.2)mの不整橢円形を呈し、深さ0.8mを測る。覆土は7層に分層され、自然堆積を示す。

遺 物 覆土中より土器小片・小礫が少量出土している。埋没過程で流入したものと判断される。1は、口縁部付近の無文の破片。2は、RLの単節縄文が斜位に施文された胴部破片。3は、断面三角形の隆帯が逆U字状に貼付されている胴部破片。4は、断面カマボコ状の隆帯を縦位に貼付している、胴部下半の破片。5は、底部片。

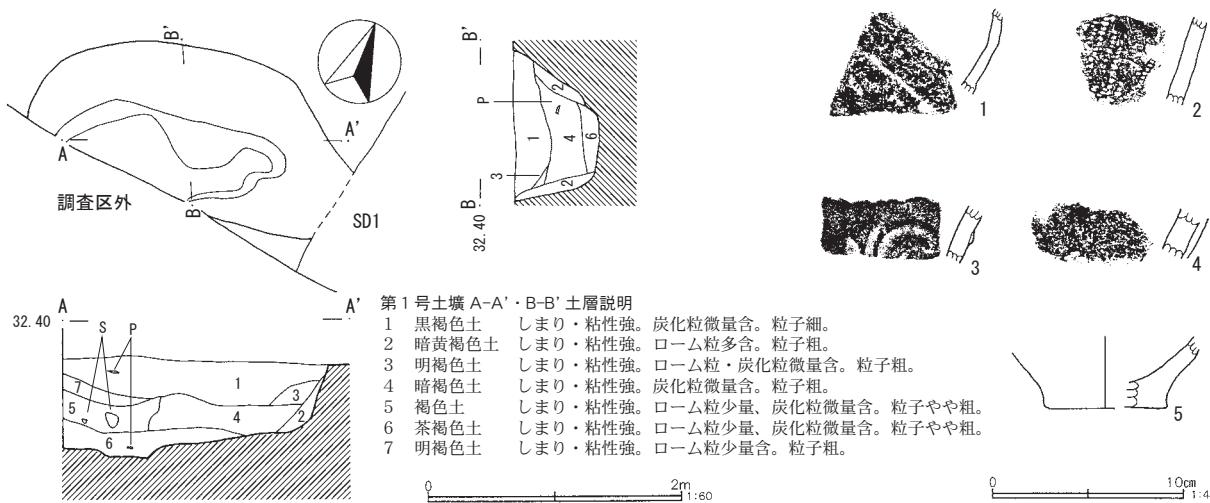
時 期 覆土中の破片から判断して、縄文時代中期加曾利E4式期。

第2号土壙 (第7・8、図・図版4・7)

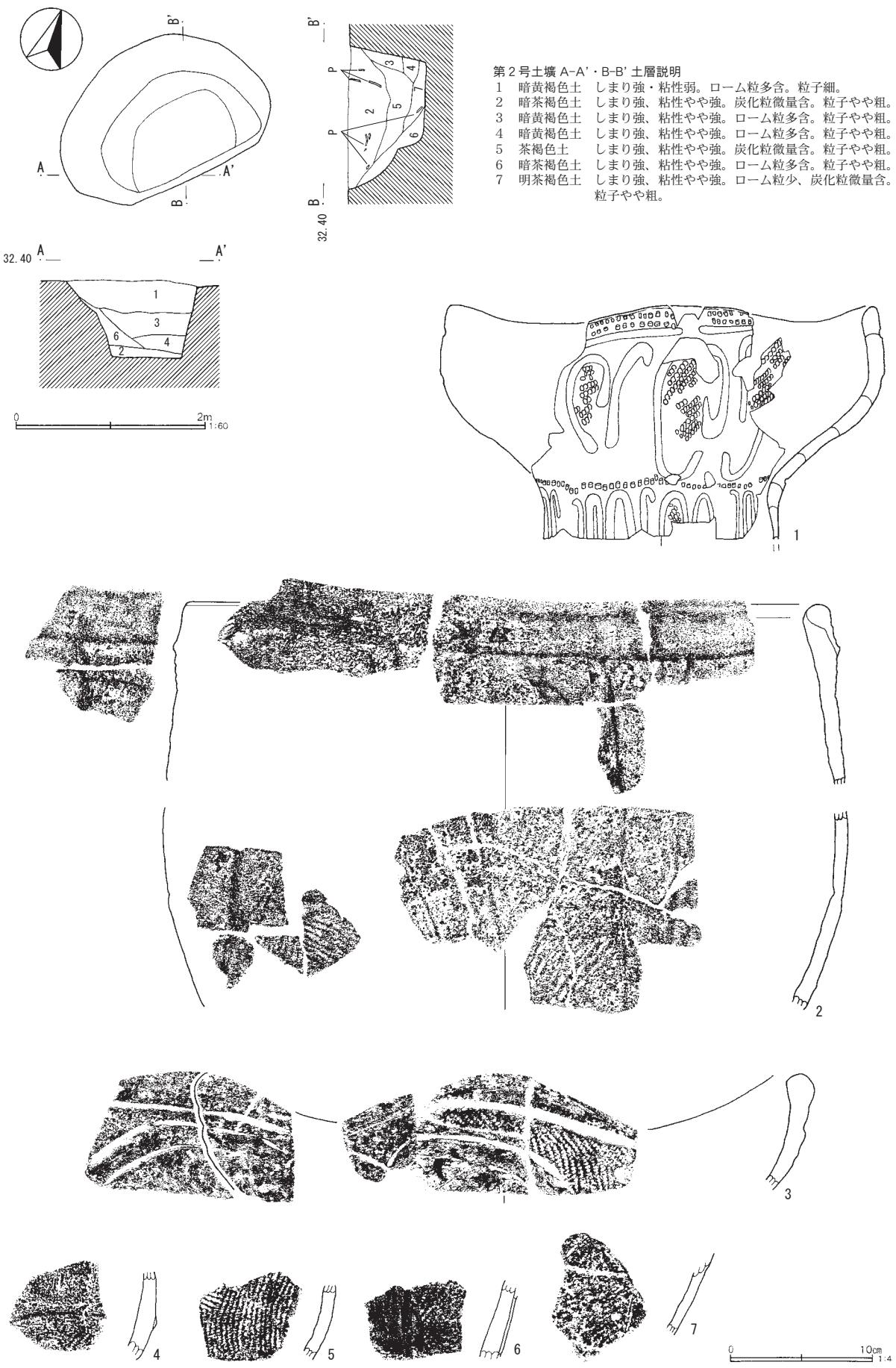
位 置 N・O・P—3~5グリットに位置する。

遺 構 長軸2.35m、短軸1.55mの橢円形を呈し、深さ0.8mを測る。壙底はほぼ平坦となっている。南東側に噴礫があり、その影響か南東側がやや潰れた形状を呈している。覆土は7層に分層され自然堆積を示す。

遺 物 覆土中より、土器片・石器が出土している。壙底からの出土は無いが、覆土中位から胴部上半の土器が逆位で確認されており(第7図1・図版4)、ある程度埋没した段階で人為的に廃棄されたものと判断される。1は、キャリバー形を呈し、推定口径30cm。口縁は波状を呈する。口縁直下に1条の沈線を巡らせ、棒状工具による2条の刺突列を充填している。口縁部は、棒状工具による1列の刺突列



第6図 第1号土壙・出土遺物



第7図 第2号土壤・出土遺物 (1)

で区画され、崩れたC字文・逆C字文が沈線で施文されている。胴部は、逆U字あるいは蕨手状の沈線が垂下している。地紋に、RL 単節縄文が斜位に施文されている。2は、推定口径45cmを測り、口縁がやや内湾し、胴部下半がやや膨らむ器形を呈する、短冊形懸垂文タイプの土器。口縁直下に断面三角形の細隆帯をタガ状にめぐらせ幅狭い無文帯を設け、短冊状に隆帯を垂下させている。地紋は細い単節RL の縄文が斜位に施文されている。3は、推定口径42.2cmで、波状口縁を呈するキャリパー形土器。地紋に単節RL の縄文を斜位に施文している。口唇下に1条の沈線を巡らせ、口縁部には2条の沈線を渦巻き状に施文し、沈線間の縄文を磨り消している。4は、断面三角形の微隆起線を頸部に横位に貼付している。胴部には、単節RL の縄文を斜位に施文している。5は胴部破片で、単節RL の縄文を密に縦位施文している。6は、胴部破片で、地紋にRL の単節縄文を斜位に施文している。断面三角形の微隆帯を2条縦位に貼付し、隆帯間の地紋を磨り消している。7は、胴部破片で、単節RL 縄文が斜位に施文されている。8は、胴部下半の破片。2条の沈線が垂下している。9は、両耳壺の頸部破片。頸部に低い隆帯を横位に貼付している。口縁部は無文で、胴部にはRL 縄文が縦位に施文されている。10は、底部。11は、チャート製の石鏃。

時 期 覆土中の遺物から判断して、縄文時代中期加曾利E 4式期。

2 屋外埋甕

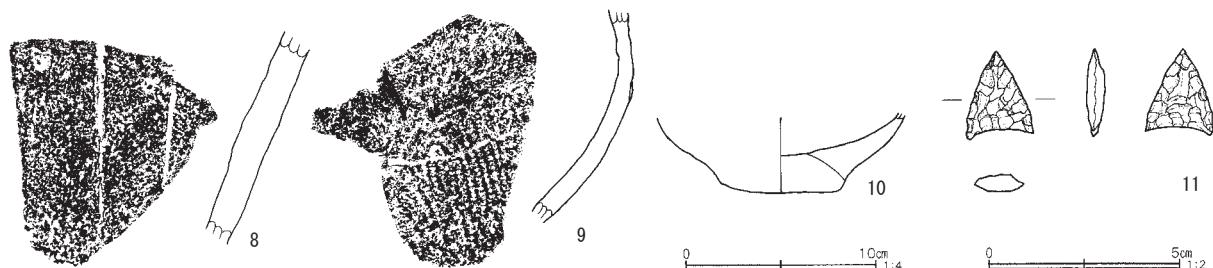
第1号屋外埋甕（第9図・図版3・7）

位 置 M・N—5・6グリットに位置する。北側は噴礫により一部が切られている。南側には第3号ピットが近接している。

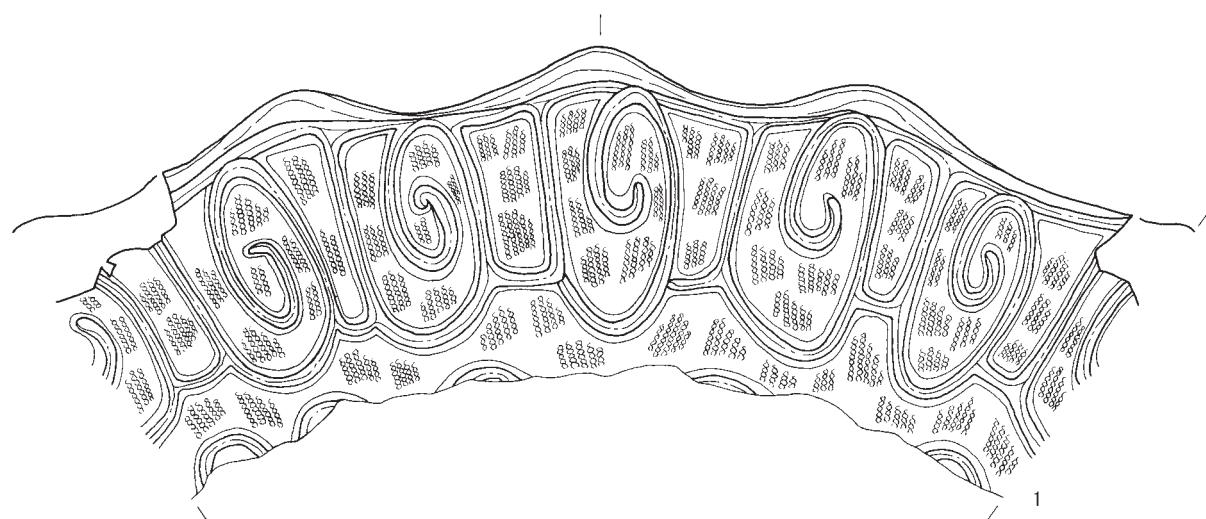
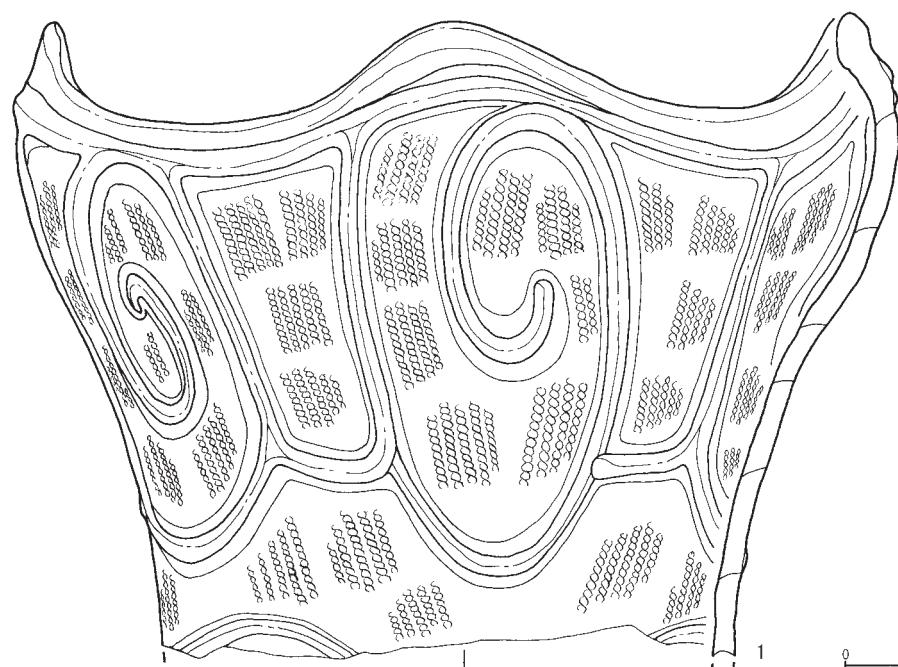
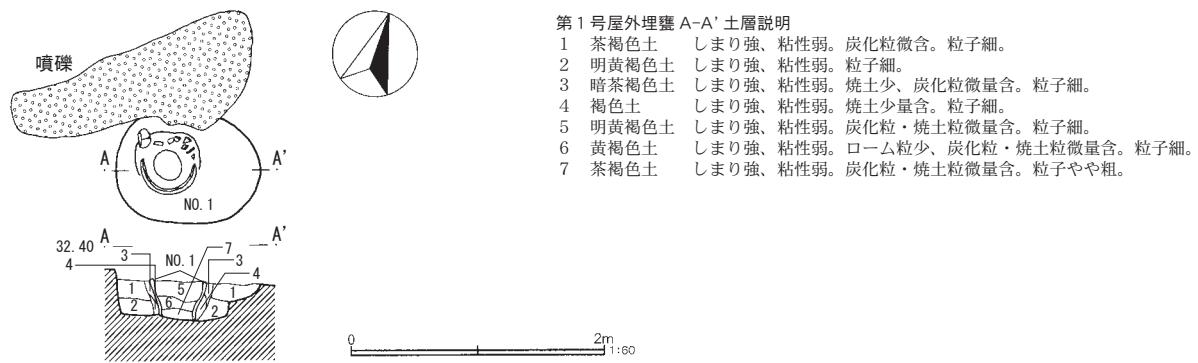
遺 構 長径1.15m、短径0.8m、深さ0.32mを測る楕円形の土壙の中に、胴部下半を欠く土器が正位で埋設されていた。覆土は7層に分層され、1・2層は、しまりが強く、土器を設置後に人為的に埋め戻された土と判断される。土器内部の覆土には、微量の焼土粒・炭化粒が確認されている。土器内面には2次被熱の痕跡は確認されない。

遺 物 1は、キャリパー形を呈し、胴部下を欠く。いわゆる梶山タイプの土器。口径42.2cm、現存器高32.8cmを測る。口縁は、4単位の波状口縁を呈し、口唇直下に1条の隆体を波状に貼付している。口縁部には、隆帯を貼付し、6単位の渦巻き文と渦巻き文間に長方形の区画を配し、文様を繋げている。波頂部と渦巻き文は単位数が異なるため、対応しない。胴部には、隆帯を逆U字状に貼付している。地紋は、RL 単節縄文を斜位に施文している。

時 期 縄文時代中期加曾利E 3式期。



第8図 第2号土壙・出土遺物（2）



第9図 第1号屋外埋葬

3 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡 (第10図・図版4)

位 置 K～Q—4～7グリットに位置する。

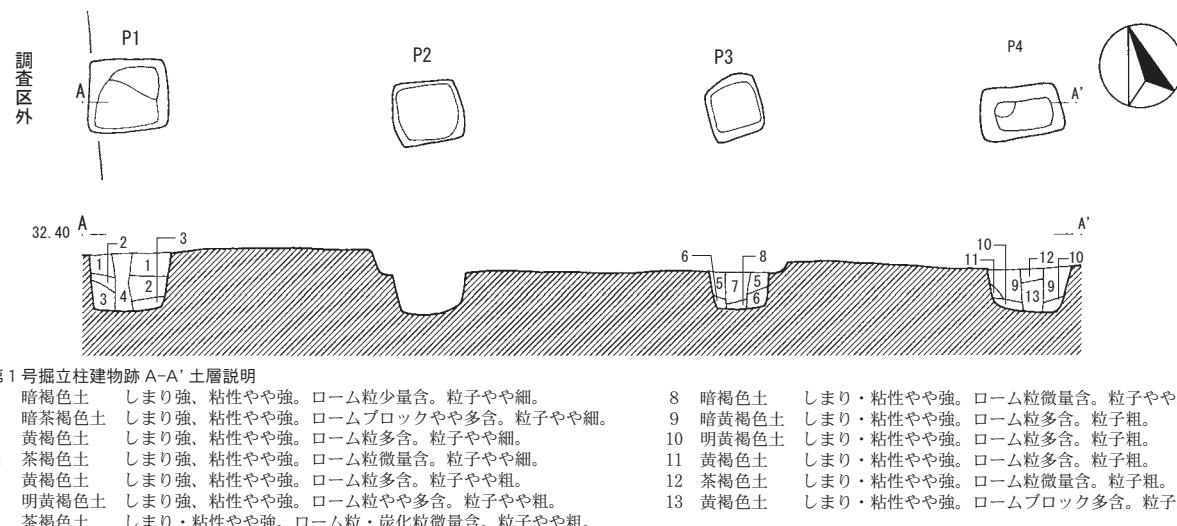
遺 構 掘立柱建物跡と推測されるピットが4基確認されている。ピットが存在する可能性のある西側及び南側は調査区外となり未調査。ピットは、概ね平面方形を呈し、壙底は平らになっている。各柱穴間の距離は、P1—P2間2.4m、P2—P3間2.45m、P3—P4間2.35mを測る。

遺 物 覆土中からの遺物は出土していない。

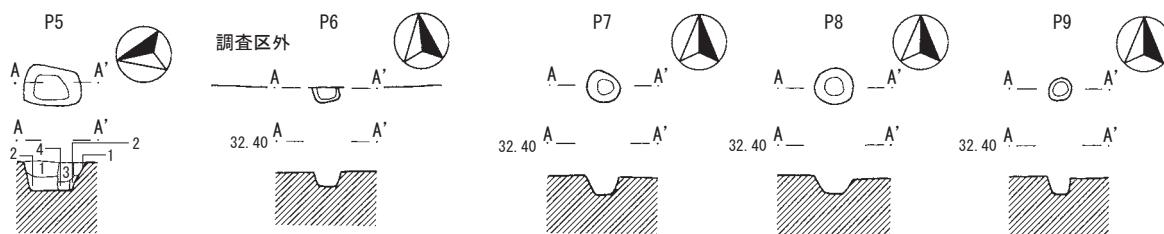
時 期 不明。

4 ピット (第11図)

ピットは5基確認されている。P5はQ・R—3・4グリット、P6はP—1グリット、P7はN—1・2グリット、P8はL—2グリット、P9はM—7グリットに位置する。いずれも覆土中からの遺物の出土は無く、時期不明。



第10図 第1号掘立柱建物跡



第5号ピット A-A' 土層説明

| | |
|---------|---------------------------|
| 1 黄褐色土 | しまり強、粘性やや強。ローム粒多含。粒子やや粗。 |
| 2 暗褐色土 | しまり強、粘性やや強。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 3 茶褐色土 | しまり強、粘性やや粗。ローム粒少量含。粒子やや粗。 |
| 4 明黄褐色土 | しまり強、粘性やや粗。ローム粒多含。粒子やや粗。 |

0 2m 1:60

第11図 第5～9号ピット

5 溝跡

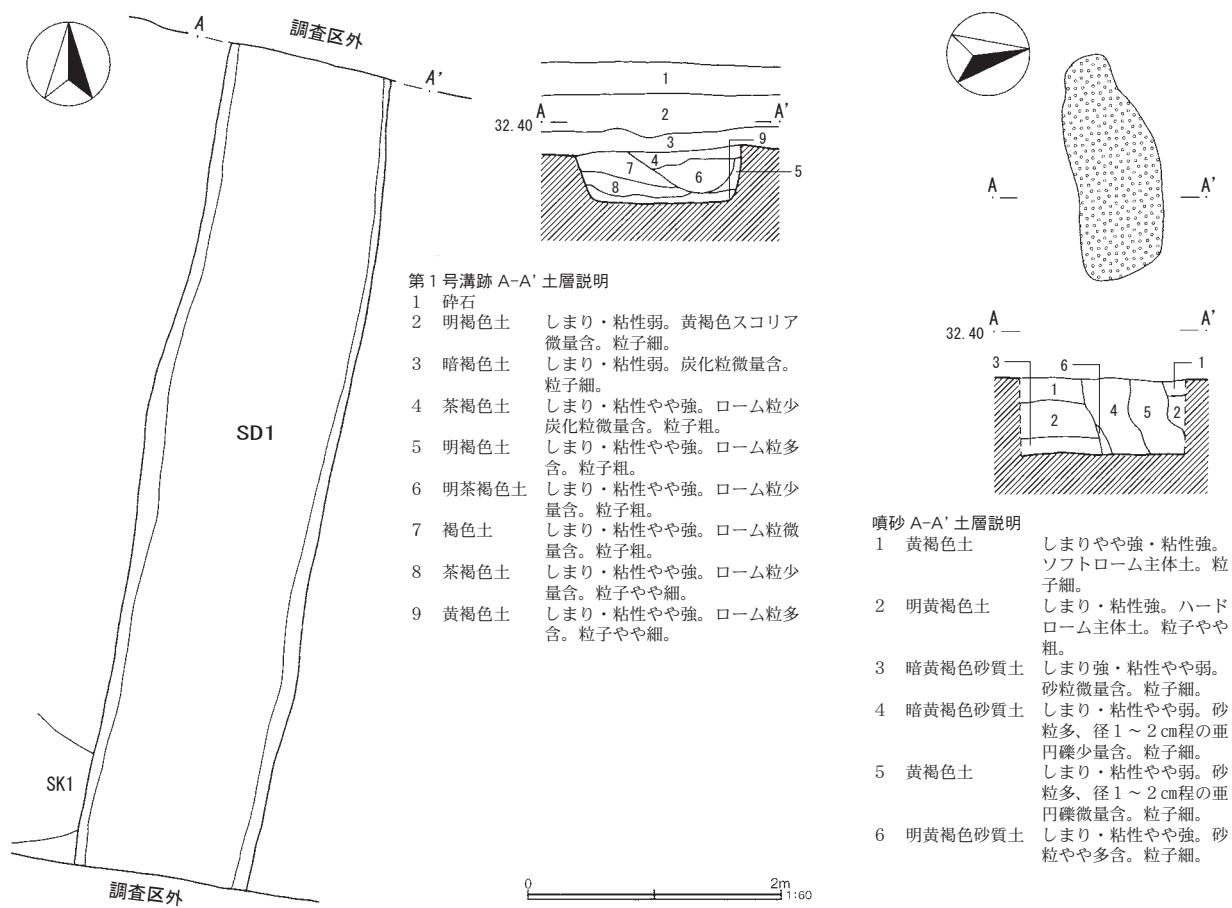
第1号溝跡 (第12図・図版5)

位 置 G・H—2～9グリットに位置する。溝の南北は、調査区外へ延びている。南側で第1号土壙および噴礫を切って掘られている。

遺 構 南北方向に、上面幅1.35m、下面幅1.25m、確認長6.48mを測り、断面は箱葉研形を呈する。溝底は平坦で、標高は、北端で31.824m、南端で31.871mとなっており、北方向に4.7cm傾斜している。覆土は6層に分層され、自然堆積を示している。

遺 物 覆土中から、長さ3～30cm程の亜円礫が70点程出土している。いずれも溝底から浮いた状態で確認されており、埋没過程で廃棄されたものと推測される。

時 期 時期を特定できる遺物は出土していない。覆土から、中世以降と推測される。



第12図 第1号溝跡・噴砂跡

6 噴砂・噴礫 (第5・12図・図版5・6)

調査区内から、地震に伴なう噴砂1箇所と噴礫2箇所が確認されている（第5図）。

噴砂は、I・J—3グリットに位置し、1.8m×0.7mの範囲で確認されている（第12図）。短軸方向に断ち割ったところ、ソフトロームの再堆積層下の砂層より60cm程砂が噴出している状況が確認された。

第2号噴礫は、F・G—8・9グリットに位置し、1.5m×0.55mの範囲で、平面レンズ状に、径3～35cm程の亜円礫が噴出している。西側を、第1号溝跡に切られている。

第3号噴礫は、M～O—4・5グリットに位置し、1.45×0.5mの範囲で確認されている、噴出物は、砂と径1～10cm程の小礫が混じっている。南側で、第1号屋外埋甕を切って、北側で第2号土壤の形状を変形させている。

これらの噴砂・噴礫の時期は、縄文時代中期の埋甕を切り、中世以降の溝跡に切られていることから、その間に求められる。

IV まとめ

今回の第3調査では、縄文時代中期加曾利E 3～4式期の屋外埋甕1、土壙2が検出された。第1次調査では、縄文時代中期加曾利E 3式期の屋外埋甕1、加曾利E 2～3式期の土壙2、集石土壙3が検出されている（1980：熊谷市教育委員会）。

新荒川沖積地における縄文時代中期後半の遺構・遺物は、微高地上に散見されている。本遺跡は、住居跡は確認されていないものの、貯蔵施設と推測される大形の土壙や、調理施設の集石土壙が確認されていることから、調査区外に住居跡が存在することは十分予想されるが、出土遺物が少ないことから、その集落規模は小規模で短期間に営まれたものであると推測される。

一方、荒川右岸の江南台地上には、勝坂式期から継続する大規模な拠点的集落である上前原遺跡（1983・2006：江南町教育委員会、20019・2023：熊谷市教育委員会）や、上前原遺跡から上流に2.2km程離れた西原遺跡（1996：江南町教育委員会）では、加曾利E 3～4式期の住居跡が50軒以上確認されている。更に2.6km離れて深谷市上本田遺跡（2000：川本町遺跡調査会）、2.2km離れて寄居町牛無具利遺跡、3.4km離れてむじな塚遺跡（1998：寄居町遺跡調査会）、1.0km離れて露梨子遺跡（1997・2002：寄居町遺跡調査会）、2.6km離れて東国寺東遺跡（1982・1993・1995：寄居町教育委員会）、0.5km離れて南大塚遺跡（2001：寄居町遺跡調査会）といった拠点的な大規模集落が1～3kmの間隔で立地することが確認されている。

これらの集落は、荒川沖積地を望む台地縁辺部を開析する小河川に面した、小支台毎の台地から若干奥まった地点に位置しており、後背地に丘陵や山地が控えていることを共通とする立地条件を備えている。

これは、荒川の漁業・石材資源を利用するとともに、日常の水利は台地上の小支谷を利用し、丘陵・山地上の動植物資源の獲得を視野に入れた、内水面域の推移帶における大河川志向型集落とみることができる。

一方、低地の自然堤防上には、一時的な活動拠点を設けるという選地が行われていたことがうかがえる。縄文時代中期末葉には、台地上の拠点集落が急速に規模を縮小し解体に向かう中、低地部に小規模な拠点を移す傾向が認められている。近年では、荒川左岸の新荒川扇状地に立地する中西遺跡（2019：熊谷市教育委員会）や、利根川の支流の福川流域に立地する上北浦遺跡において（2024：熊谷市教育委員会）、縄文時代後期～晩期にかけての集落跡の調査事例が増えてきている。

本遺跡も、そのような集落動態の中において、加曾利E 3式期からの、低地部への進出の一端を示す事例とみることができ、今後、調査の進展により、本地域における土地開発の様相が解明されることが望まれる。

引用・参考文献

- 1980 熊谷市教育委員会 『熊谷市埋蔵文化財調査報告 万吉西浦遺跡』 昭和54年度
- 1982 寄居町教育委員会 『東国寺東・平倉遺跡』 寄居町文化財調査報告第7集
- 1983 江南町教育委員会 『本田・東台遺跡Ⅱ 上前原遺跡』
- 1983 寄居町教育委員会 『東国寺東・増善寺遺跡』 寄居町文化財調査報告第11集
- 1991 埼玉県教育委員会 『万吉下原遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査報告18
- 1995 江南町 『江南町史』 資料編1 考古
- 1995 寄居町教育委員会 『町内遺跡3』 寄居町文化財調査報告第14集
- 1996 江南町教育委員会 『千代遺跡群—縄文時代編—』 埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書1
- 1997 寄居町遺跡調査会 『露梨子遺跡（第2次調査）』 寄居町遺跡調査会報告第15集
- 1998 寄居町遺跡調査会 『むじな塚遺跡（第5次調査）』 寄居町遺跡調査会報告第16集
- 2000 川本町遺跡調査会 『上本田遺跡I』 川本町遺跡調査会報告書第5集
- 2002 寄居町教育委員会 『露梨子遺跡（第4次）赤浜遺跡（第2次調査）』 寄居町文化財調査報告第26集
- 2006 江南町教育委員会 『上前原遺跡第2次発掘調査報告書』 江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
- 2019 熊谷市教育委員会 『三ヶ尻古墳群 西別府館跡 上前原遺跡 元境内遺跡 野原宮脇遺跡』 一市内遺跡発掘調査報告書VI— 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 2019 熊谷市教育委員会 『中西遺跡II』 熊谷市埋蔵文化財調査報告第34集
- 2023 熊谷市教育委員会 『上中条中島遺跡II 諏訪木遺跡VII 上前原遺跡VI・VII』 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書第45集
- 2024 熊谷市教育委員会 『上北浦遺跡』 熊谷市埋蔵文化財調査報告書第46集

写 真 図 版



遺跡周辺の地形航空写真（平成21年撮影）



遺跡範囲航空写真（平成21年撮影）

図版 2



調査区遠景（南から：平成11年3月20日撮影）



調査区近景（南から：令和6年6月13日撮影）



調査区垂直写真（令和6年6月13日撮影）



調査区東壁土層（西から）



第1号屋外埋甕



第1号屋外埋甕半裁



第1号埋甕調査状況

図版 4



第1号土壙（北から）



第2号土壙調査状況（北から）



第2号土壙遺物出土状況



第2号土壙遺物出土状況



第2号土壙完掘（北から）



第1号掘立柱建物跡（ピット1）



第1号掘立柱建物跡（ピット2）



第1号掘立柱建物跡（ピット3）



第1号溝跡遺物出土状況（南から）



第1号溝跡完掘（北から）



第1号溝跡調査状況



第1号噴砂半裁（東から）

図版 6



第2号噴礫確認状況（西から）



第3号噴礫確認状況（東から）



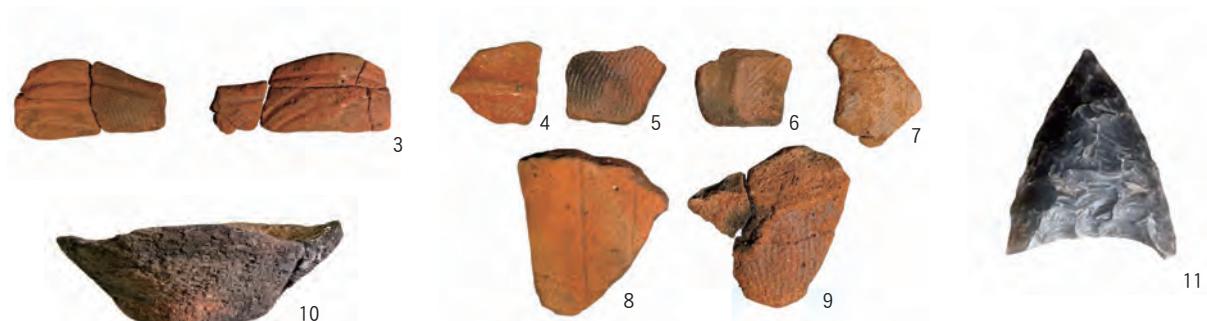
調査風景



第1号土壤出土遺物

第2号土壤出土遺物 1

第2号土壤出土遺物 2



第2号土壤出土遺物 3

第2号土壤出土遺物 4

第2号土壤出土遺物 5



第1号屋外埋甕

報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------------|---|------|------|-------------------|--------------------|------------------------------|---------------------------|------|
| ふりがな | まげちにしうらいせき | | | | | | | |
| 書名 | 万吉西浦遺跡III | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第53集 | | | | | | | |
| 編集者名 | 森田 安彦 | | | | | | | |
| 編集機関 | 埼玉県熊谷市教育委員会 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒360-0107 埼玉県熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター Tel 048-536-5062 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2025（令和7）年11月28日 | | | | | | | |
| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 世界測地系 | | 調査期間 調査担当者 | 調査面積 (m ²) | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東緯 | | | |
| 万吉西浦遺跡 3次 | 熊谷市万吉805番 地2 | 0059 | 066 | 36° 07' 22" | 139° 21' 49" | 20240516 20240617 森田安彦 | 114 | 墓地 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|--------------|-----|------|------------------|---------|------------------|
| 万吉西浦遺跡 3次 | 集落跡 | 縄文 | 屋外埋甕 1基 土坑 2基 | 縄文土器・石器 | 時期不明の墳砂・墳礫跡3箇所確認 |

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第53集

万吉西浦遺跡Ⅲ

令和7年11月28日発行

発行／埼玉県熊谷市教育委員会

印刷／朝日印刷工業株式会社